

## B グループ アメリカの大学院について（授業，研究室，卒業）

### 授業について

アメリカ大学院での授業は様々な形式がありますが、多くはレクチャー形式の授業です。ただし、授業の雰囲気は日本とは違い、学生からの質問が多いのが特徴でしょう。先生と学生の Discussion で授業が成り立っている印象で、レクチャー形式とは言っても先生が淡々と話し、学生がひたすらノートを取るような形式ではないです。また少数ではありますが、先生があらかじめカメラに向かって講義を行い、その様子をビデオで見る形式の授業もあります。少ない人数で輪になって議論を行い、意見を出し合うような形式の授業は理系だとまずありません。こういう形式は文系やビジネスの人達に多い印象です。いくつかの授業ではグループプロジェクトと言って、割り当てられたグループで課題をこなし、グループ単位で成績をつけられるという評価形式があります。自分の成績が他人の頑張りに影響し、また他人の成績に対しても自分が責任を持つという形式は日本では珍しいのではないのでしょうか。また予習の量が多く、授業前に読まなければならない資料の量が多いのが特徴的です。宿題の量もとても多いです。宿題に関しては、先生は学生達が積極的に協力することを勧めています。しかしあくまで理解を深め合う Conceptual Discussion であって、当然ながら丸写しに対しては厳罰が下されます。学生は宿題やグループワークを通して輪を広げ、理解を深めていきます。多くの授業では既にその授業を履修し、優秀な成績をおさめた人が TA としてサポートにまわります。週に1度はオフィスアワーと言って、質問に対応してくれる時間を作ってくれます。TA も月に 20 万ほど給料をもらっていて、評価が悪いとクビになるのでしっかり教えてくれます。日本よりも授業は重く辛いですが、先生や TA 達のサポートがしっかりしていて、学べるものも多いのではないのでしょうか。

### 研究室について

日本、アメリカ、欧州それぞれでお金の扱いが異なる。大学院の学生の生活費学費に関して、日本やイギリスでは自腹か奨学金によることが多く、アメリカでは RA や TA などによってプロジェクトのお金で学生の生活費学費がカバーされることが多い。ア

アメリカのほうが研究プロジェクトのお金を使える点で産業に直結できる一方で、基礎研究がしづらいとも言える。日本では教授が学生のお金を世話しなくてもいいので比較的研究室運営に余裕があるが、学生に負担がかかる。資金源についても、アメリカでは資金を獲得するためにプロポーザルを書き続けなければいけないが、その分資金源も多い。日本ではよくも悪くも資金源が少ないが、倍率も比較的ゆるい。イギリスではRA制度がないことが多いので、奨学金の支援期間終了後に留学を継続するためには新しく奨学金を探さなければならないが、PhD コースの途中段階から応募できる奨学金は限られている。アメリカでは資金探しの期間はフレキシブルだが、イギリスではその点の融通がききづらい。研究室の組織は、個々人がプロジェクトを持っている場合とチームで動いている場合がある。個人ベースの場合、先生が学生自ら見つけてきたテーマを尊重する場合や、先生が大きなテーマで予算を獲得し、その中のサブテーマを学生に割り振っている場合がある。

#### 卒業について

「論文3本」と卒業の基準が明確に決まっている多くの日本の大学と異なり、アメリカの大学にはそのような客観的基準がないことが多い。Thesis committee の先生が主観的に判断する。よって、いくら成果を出しても「もうすこしやってよ」と卒業が伸びていくこともある。従って、卒業までに達成するゴールについて、先生と事前によくネゴシエーションしておくのが賢いやり方である。すなわち、「ここまでやったら PhD ちょうだいね」と、卒業の1年ないし2年前に agree して、必要なら文章に書いておくのである。また、先生によっては、funding の都合によっても卒業が伸びたり早まったりする。つまり、funding が潤沢にあって、重要なマイルストーン（デモなど）が卒業時期よりも数ヶ月後にある場合は、その期間も学生に残ってもらいたいと先生は願う。（卒業して同じプロジェクトでポスドクとして雇われるケースも多い。）逆に、funding が切れてしまう場合は、そのタイミングで卒業することを急かされることもある。いずれにしても、先生と密にコミュニケーションをし、円滑な人間関係を気付いた上で、卒業の基準について合意しておくことが重要でしょう。

グループメンバー：曾根、山本、方、小野、中村

文責：中村